

私の履歴書 E先生との邂逅から*

蟻塚昌克**

まもなく退職するにあたり、これまでを振り返りつつ一人の研究者としてのあれこれの過程を整理してみる。その時々を経路のなかで何を考え、どういった選択をたどってきたのか。当然ながらそこに登場するのは多くの人々とのやりとりである。日本経済新聞の最終面連載の『私の履歴書』は毎朝必ず目を通して、ここに登場する人物の個性あふれるよもやま話には興味が尽きない。編集者が読み物のツボを心得ているからであろう。そこで私も、これに倣って履歴書を書き始めることとする。記憶力の低下を前にした備忘録の作成でもある。以下は、その一節となる。

日本社会事業大学に入学したのは、1971年の春。すでに前年の70年は高度経済成長の最終段階にあたり、大阪・千里丘陵では繁栄を誇るシンボルとして万国博覧会がひらかれている。同時に秋に実施された国勢調査では、総人口に占める65歳以上人口が7%ラインに入り込み、わが国は先進国のなかで初めて高齢社会の入り口に立つことになった。公害問題や都市部への人口集中によるひずみなどが指摘されはじめていたものの、時代はもう一段の豊かさが手に入るように見えていた。政治では、日米安全保障条約の改定を迎え、社会経済にとっていくつかの節目となった年でもあった。

社会事業の社会という冠に興味を持ち、その事業は日本社会の一角を占める重要な柱のような気がして大学の門をたたいたのである。とはいえ、入学して履修した教科は社会事業総論、社会事業方法論といったもので、求めている社会のありようについての学問とはかけ離れているような気がして、そのうち授業には出なくなった。取得したのは、たしか1年で8単位、2年で12単位だった。

転機は3年になってやってきた。開講科目のひとつに「社会政策」がおかれている。社会政

* *My Personal History—from an Encounter with Professor E—*

** Masakatsu ARIZUKA 立正大学社会福祉学部社会福祉学科教授

キーワード：日本社会事業大学、社会政策、E先生、山谷、焼酎、不安定就労層、経済成長のはざま

策とは何か。社会事業よりも骨太で本質的な学問ではないかと思い、受講しようと考えた。教室に入ってみると、学生がひとりいるだけで、がらんとした教室でE先生⁽¹⁾が何かほそほそと話をしている。マイクもなく、ゆっくりと小さな声が聞こえるだけでよくわからない。いまでも記憶にあるのは、先生は背広にネクタイではなく、やや日本人離れした風貌で灰色の作業服のようなものを着ていたことである。

2回目の授業から聞き取れるようにと前列にすわったものの、教科書や教材は使わず、講義の核心部分はほとんど理解できなかった。やがて回を重ねるうちにもうひとりの学生は出席しなくなり、結局私が教卓の前で対面することになった。何回めかの授業の途中でE先生から「君は誰ですか」と聞かれ、自己紹介をした。次の授業では昼前にパンと牛乳を買ってきてほしいといわれ50円玉を渡された。こうしているうちに、ある日の授業で「君は山谷を知っていますか」といわれ、「知りません」と答えると、それではと連れて行ってくれることになった。岡林信康の日雇い労働者の心情をうたった「山谷ブルース」は聞いたことがあるが、まさにその山谷だとは⁽²⁾。

翌週の授業の日の昼、E先生と常磐線の南千住駅で下車した。大通りを浅草方面に向かって歩くと簡易宿泊所が点在し、さらに小路に一步入ると木造モルタルづくりの粗末な2階屋が密集している。その割には人影が少ない場所だ。先生は、ここがどういった地区なのか。だれが住んでいるのかといったことは話してくれなかった。先生は、何か所かの簡易宿泊所をまわって玄関や廊下の奥をじっと覗いていた。やがて後をついて歩いているうちに南千住の駅が見えてきた。先生は、一休みしようといい、駅前の店に入った。江戸時代にあった小塚原処刑場の隣の大きな酒場である⁽³⁾。薄汚い店にはいってびっくりした。午後3時過ぎなのに広い店内はさまざまな作業服を着た満杯の客でにぎわっており、酒を飲んで酩酊している。ざっと40人ほどはいただろうか。

E先生は、慣れた様子で空いたテーブルを見つけて焼酎ハイボールを頼んだ。飲み始めると先生は、ぼつりぼつりと簡易宿泊所、ドヤの成り立ちを語り、この街に時々通っていること、そこで知り合った日雇い労働者の身の上話などをしてくれた。授業と同じ語り口ではあるが、これまで経験したことのない場所を背景にして、まったく違う先生の姿とその世界があることを知って驚かされた。

山谷に行ってからE先生との距離は縮まり、今度は池袋の西口公園に連れて行かれた。そばには南千住と同じような昼からにぎわっている店があった⁽⁴⁾。なぜ、西口公園なのか。そのうちわかることになったのだが、そこは山谷の玉姫公園と同様に早朝から仕事を求める日雇い労働者と建設現場の手配師が集まる青空労働市場だったのだ。池袋駅東口にも行った。浅草行きのバス停のそばに間口3間ほどの立ち飲み屋があった。客はカウンターの前にたって酒を頼むのである。無銭飲食客を警戒してか、すべてその都度払いになっている。床は板張りではなく土間で、先客の食べ散らかしや酒で濡れている。

E先生は、この店では焼酎の後にコップ一杯の日本酒でしめる。その日の先生は珍しく酔い

が早く、池袋の隣駅にある自宅までつきそっていった。奥さんに叱られた。

こんどは、E先生の大学の研究室にきなさいと言われた。たずねると入口で女性が黙々と帳票類の山を整理していた。奥には大山博さんがいた。大山さんは、明治学院大学の院生で山谷に行くたびにごちそうしてくれた。大利根ではなく、鮎忠という焼き鳥屋である。作業をしていたのは、阪南大学・日本女子大教授として活躍した深沢和子さんだということを後で知った。先生は学問研究という知的なしごとがあることを体験させようと、声をかけてくださったのだろう。

授業でどんなことがらを教授されたかは、さっぱり覚えがない。いまと違ってシラバスも存在しない時代である。後になって理解できたのは、山谷に通っていたE先生の研究領域が都市の不安定就労層の存在、その労働と生活の再生産だということである。経済成長のはざまで、いったい何が起きているのか。そこにはどういった人びとが、どんな状態で暮らしてきたのか⁽⁵⁾。

こうしてE先生と出会って、やがて私は求めている学びの方向を、うっすらぼんやりと知ることになったのである。(了)

註

- (1) 江口英一 (1918～2008年)。経済学者で社会調査を通じて実証的な貧困研究にあたる。当時は中央大学経済学部教授で日本社会事業大学講師。顔写真出典：拙著『日本の社会福祉』(全国社会福祉協議会2019年)
- (2) 台東区日本堤。東京オリンピックの最盛期には2万人近くの日雇い労働者が住むドヤ街といわれた。
- (3) 南千住駅前に大衆酒場大利根があった。焼酎ハイボールはビールジョッキで1杯80円。この界限では一番の人気店。
- (4) 池袋駅西口の大衆酒場。ふくろ。朝から営業で当時は小便臭かった。現在は建て替えて繁盛している様子。
- (5) 江口英一・西岡幸泰・加藤祐治『山谷 失業の現代的意味 (専修大学社会科学叢書)』(未来社1979年)